【郷土史への扉】

明治維新と霧島 その❶

明治維新とは

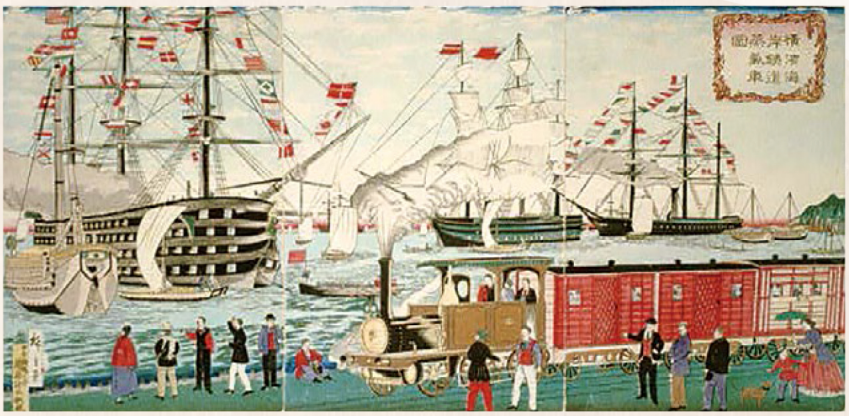
今年は明治維新一五〇年の節目の年です。今回から「明治維新と霧島」をテーマに、明治維新と霧島の関わりについて紹介します。

変革を迫られた日本

十八世紀後半にイギリスから始まった産業革命によって近代化が図られ、十九世紀初頭から政治的・軍事的・経済的に威力を増大した西洋列強国は、アフリカやアジアなどの広大な地域を植民地化する「帝国主義」を展開していきました。

この帝国主義の時代において、東南アジアの植民地化や中国（清国）で起きたアヘン戦争とその戦後処理（南京条約・香港の割譲）は、膨張する西洋列強の脅威であり、衝撃的な事件として日本にもたらされました。

さらには嘉永六（一八五三）年、アメリカのペリー提督率いる軍艦が浦賀に来航したことをきっかけに、一気に倒幕への流れが加速しました。



明治５年、浮世絵に描かれた横浜の鉄道と船（三代目歌川広重作『横浜海岸鉄道蒸気車之図』）

明治維新という「革命」

明治維新は、封建社会から資本主義社会へと移行する日本史における政治的革命であり、国の支配権は明治天皇の下、天皇親政に戻りました。政治面では中央集権体制となり、貨幣制度の改変や税制度の確立によって経済の安定化が図られました。

特に、殖産興業を進める中で工業化を第一に掲げ、政府主導で富岡製糸場などの官営模範工場が造られました。併せて交通機関の整備や通信分野の発展が進みます。明治五（一八七二）年、新橋－横浜間に建設された鉄道は、明治二十三（一八九〇）年までに総延長が一二五〇キロに達し、明治十三（一八八〇）年までに主要都市が電信で結ばれました。西南の役ではこの電信が大いに活用され、政府軍の勝利に貢献しました。

一方で、士族の不平などで深刻化する国内問題と西欧列強による侵略の脅威に対抗するため、軍制の強化と充実を図る徴兵制を導入します。「富国強兵」というスローガンの下、官民総力で西洋列強と肩を並べる国民国家を作ろうとしました。

そのほか、身分制度の廃止（四民平等）、東京への遷都、廃藩置県、大日本帝国憲法の発布、学制の公布などの改革を次々と行いました。

列強と肩を並べる契機に

明治維新は、二六〇年続いた江戸幕府を倒しただけでも大きな偉業ですが、それ以上に注目すべきは、明治維新後に大きな社会的混乱もなく新しい社会を作ったことです。

当時は西洋の列強諸国が日本に迫ってきており、いかに日本の独立を守るかということが喫緊の課題でした。そのため、富国強兵とそれを支えるための殖産興業という明快なビジョンを自ら描き、官民一体となって、自分たちの手で新しい社会基盤を作り上げました。

このようにして、二〇世紀の初めまでには、明治維新のさまざまな目標はおおむね達成され、日本は近代工業国になる道を着実に歩んでいきました。

特に注目する点は、明治三十五（一九〇二）年の日英同盟締結と、日清戦争（一八九五年）、日露戦争（一九〇五年）の二つの戦争で勝利したことです。これにより日本は西側諸国から一目置かれ、主要たる世界の国々と肩を並べるようになりました。

（文責＝鈴）